

「まったく、何度言わせれば気がすむんだ。あれ程書類のチェックはしっかりやれと言っただろう」

（あ～、えろ。何でコイツこんなにエロいんだ？　なんか変なフェロモンでも放ってんのか？）

「こういう些細なミスの繰り返しで信用を失っていくんだ。分かっているのか？」

（乳首とかどんな味すんだろうな。あのシャツひん剥いて乳首どろっどろになるまで舐め回してえ……）

「だいたい佐々木は普段からそういう所が多いんだ。この前も……」

（反対の乳首もチュルチュルしゃぶってビンビンに勃起させて、指でもたっぷり弄くり回してオフィスであんあん喘がせて……………ん？）

「もう二年目なんだからしっかりしてもらわないと。これから後輩も増えていって……」

（何だあの胸のポチポチは……まさか乳首か？　いつの間に勃たせたんだ？　クソッ、もっとじっくり見せろッ。佐々木の勃起乳首、もっとしっかり見せるんだッ！）

「聞いているのか、佐々木ッ」

「っ、は、はい……っつ、～～す、すみません……っつ♡」

——ある日突然、上司の心の声が聞こえるようになった。

心の声が聞こえるのは目の前にいる蓮見部長一人だけ。——蓮見陽二郎。32歳。独身。この若さで部長になった滅茶苦茶仕事の出来る人だった。

しかもかなりのイケメンで、女性社員が選ぶ社内で結婚したい人ダントツの一位である。

イケメンで若くして部長で、独身女性社員が皆蓮見部長を狙うのは当然の事なのだけれど、しかしあからさまにアプローチする女性は一人もいない。

部長は仕事出来る分自分にも周りにも厳しく、男性だろうが女性だろうが若かろうが可愛かろうが、仕事でミスをすれば容赦なく叱責した。女性社員からの飲みの誘いは一切受け付けず、蓮見部長の厳しく真面目でストイックな性格は社内で知らない人はいなかった。

——そんな部長の心の声が“こんな”だとは、誰も想像すらしてないだろう。

最初は訳が分からず混乱した。部長の方から部長の声で、とても変態っぽい言葉が聞こえてきたのだ。

僕の乳首をしゃぶりたいとか、僕にチンコをしゃぶらせたいとか、チンコを……中に挿れたいとか……部長からはいつもそんな言葉が聞こえた。

勿論部長に「僕でエロい事考えてますか？」なんて確認した事はないから、コレが本当に部長の声なのかは分からない。

部長は厳しくて真面目で、僕の仕事のミスにも容赦なく叱責してくる人だ。そう思うと自分でも本当に部長の心の声が聞こえてるのか、それとも僕の頭がおかしくなったのか判断がつかなかった。

「いいか、お前はこれからが大事な時期なんだぞ。これからの仕事の内容次第で大きなプロジェクトも……」

（いいぞ、シャツの上からハッキリ勃起乳首が見える。なんてエロい乳首なんだ。こんな場所でぷっくり勃たせて……俺にしゃぶってくれって言ってるみたいじゃないか。クソッ、今すぐ押し倒して思いっきりしゃぶってグリグリ摘んでやりたい……っっ！）

「っっ……♡ は、はい……っっ♡」

それでも、部長の声で乳首をしゃぶりたいとか摘みたいとか言われて、気にしないようにしてもソコがブク♡ブク♡と反応してしまっていた。

それを部長は気付いて心の声は益々いやらしくなり、そして僕の乳首も更に反応してしまう。

本当に、一体どうしてこんな声が聞こえるようになったんだろうー

部長の厳しい叱責を聞くと同時に心の中のいやらしい声を聞いて、僕はずっと俯きながら乳首を勃たせていた。

「ここの部長と直接会うのは初めてだったか？ まああまり緊張するな、部長はお前の事をかなり褒めていたからな。資料は分かりやすいし電話でのやり取りも……」
(ああたまんねえ、新幹線の中で3時間隣の席とかマジで地獄だったわ。手は出せないしチンポも勃たせらんねえし……まあそれでも3時間ずっと頭の中でコイツのケツ孔犯してたけどな。何回奥にザーメンぶち込んだか……おかげでチンポ抑えんの必死で……)

今日は蓮見部長と二人で出張に来ている。移動には新幹線を使い、席は部長と隣同士だった。

部長は新幹線に乗っている間ずっと、頭の中で僕を犯していた。

「はっ、はい……っっ♡ きょ、今日は……よろしく、お願いします……っっ♡♡」

お尻の中がじん♡じん♡熱くなっていて、足が少しふらついた。

(ず……ずっと……♡ お尻のなか犯され〴〵てた……っ♡ さ、さんじかんずっと……部長のちんこに〴〵……っっ♡♡)

最近では声が聞こえるだけではなく、部長が頭に思い浮

かべている光景まで伝わってくるようになった。
部長が僕を、自身の逞しいチンコで僕のお尻を犯している光景が、まるでテレビのように鮮明に伝わってきた。
新幹線に乗っていた為に妄想は新幹線の中中心で、僕を膝の上に乗せて犯したり、または僕を席に押し倒して犯したり、或いは流れる景色を見せながら後ろから犯したりと色々な体位で犯された。
それから普段いるオフィスだったりエレベーターの中だったり満員電車の中だったり―― 3 時間の間に僕は色々な場所で部長に犯されてしまった。

（おしり〴〵……っ♡ じ、実際に挿れられたわけでもないのに♡じんじんする……っ♡ ちくびも〴〵……すごく熱くなってる〴〵……っ♡♡）

乳首も部長の妄想の中でたっぷり犯されてしまったので、絆創膏の中でじん♡じん♡疼いていた。――蓮見部長と二人での出張だったので、念の為乳首に絆創膏を貼っていたのだけどそれが早速役に立ったようだ。シャツから乳首が浮き出ていないのをこっそり確認する。

「そろそろ時間だな、行くぞ。まずは部長への挨拶だ」
（さて、仕事に集中するか。終わったらまた佐々木の可愛いケツ孔を犯してやろう）

「は……♡はいい……っ♡」
今日明日と泊まりがけの出張なので今日は一日中部長と

一緒に過ごす事になる。夕飯も一緒にホテルの部屋も隣で、ずっと部長のいやらしい声を聞かなければならないと思うと一層お尻が熱くなった。

因みに蓮見部長は僕と二人だけの時は大抵いやらしい事ばかり考えてるけど、仕事している時は当然それに集中していてその姿は男でも見惚れるくらいカッコよかった。

的確な判断力に冷静な対応力、頭の回転が早く取引先とのやり取り中僕は部長の説明について行くのが精一杯だった。

「今日はよくやったな、佐々木。作った資料も完璧だったぞ」

（少し疲れた表情もエロいな。あの可愛い顔にザーメンぶち撒けてドロッドロにしてやりてえ……）

「っっ……♡ あゝ……あゝりがとう、ございませ……♡♡」

今日の仕事が終わりホテル近くの居酒屋で夕食をとる。明日も仕事なのでお酒は一杯だけだ。

向かい合って座る部長からいやらしい言葉が聞こえる。部長の頭の中では精子でどろどろになった僕の顔が浮かんでいた。

「自分ではどうだ？ 手応えは感じたか？」

(小せえ口だなあ。あそこに俺のチンポぶち込んでやったらどんな顔するかな。喉奥までがっぼがっぼチンポ出し挿れして、でもって佐々木のチンコ足でぐりぐり踏み潰して虐めてやったら……どんな反応するだろうな……)

「ひ……っっ♡ つ、あゝ、あのゝ……っ♡ 僕は……部長たちの会話をゝ……♡りゝ、理解するのが、せーいっぱい……っっ♡♡」

部長はどうやら若干嗜虐的な性癖を持っているみたいだった。僕をいじめるのが好きみたいで、部長の頭の中で僕はいつも鳴かされていた。

心の声も口に出すそれよりもずっと乱暴な言葉遣いで、もしかしたらこれが部長の素なのではと思うと何故か胸がドキドキした。

「そうか？ まあ徐々に覚えていこうから大丈夫さ。あそこの部長も実際会って更にお前の事を気に入ったみたいだからな」

(？ 顔が赤いな、あれだけの酒で酔ったのか？ ったく、ただでさえエロい顔が余計エロくなったじゃねえか。ああチンポぶち込みてえ。狭いケツ孔指でぐちょぐちょに掻き回して、俺のガッチガチのデカチンポでガンガンにケツの奥突いてやりてえ)

「ふッ……♡♡ そ、そう`ですか……っ？♡ う、うれしいです……っ♡♡」

部長の頭の中に、お尻の孔を指で搔き回されていやらしく喘ぎ、そして部長の巨大チンコを挿れられ更に激しく喘がされる僕の姿が映像になって流れた。

お尻の孔がキュン♡キュン♡疼く。落ち着かなくて椅子に座ったままお尻をモゾモゾさせた。

(ベッドに押さえつけて、ビンビンに腫れた乳首しゃぶりながらケツまんこ犯して……それでイヤイヤって鳴きながら締めつけてくるまんこに、妊娠確定の濃厚ザーメンぶち込んで……ベッドで犯したら次は浴室に連れてって……)

「っ……♡ っ……♡ っっ……♡♡ はあ…っ♡ はあ…っ♡ はあ…っ♡ んふう……っ♡♡」

居酒屋で向かい合っている最中僕はずっと部長の頭の中で犯され続け、身体はどんどん熱くなりその所為でほんの少しのビールで完全に酔った状態になってしまった。

「大丈夫か、佐々木？ ビール一口でこんなに酔うなんて……お前がこんなに酒に弱いとは思わなかったぞ」
(まさかこんな堂々と身体に触れるなんてな。細い身体

だ。ケツも小せえし、俺のデカチンが突っ込んだら壊れちまうかもな)

「あああ……♡♡ ぶ……ぶちょお……っ♡♡」

部長に支えられホテルのエレベーターに乗り込む。背の高い部長の肩に腕を回すように支えられ、身体が密着し、いつもより心の声が大きく聞こえた。

部長の右手が支えるように腰にしっかりと回っている為かそんな言葉も聞こえてくる。

「吐き気はどうだ？ 気持ち悪くないか？」

(乳首はここら辺か？ ……ん？ なんか感触がおかしい気が……)

「ンンン……ッ♡♡ だ、だいじょーぶ、です……♡♡ あっあっ♡♡」

腰にあった右手が胸の方に移動した。そして丁度乳首がある位置をぐり♡ぐり♡撫でる。そんな風に実際に乳首を触られるのは初めてで、絆創膏の中でジン♡ジン♡突起が疼いた。

「……そうか、佐々木、エレベーターに着いたぞ。もうすぐ部屋だからな」

(クソ、エロい声出しやがって、やっぱココが乳首なのか？ 何か貼ってある感触が……まあいい、部屋に着くまで乳首弄り続けてやる)

「あっあっあっ♡♡ ぶ、ぶちよ……っ♡ ああっ♡ンン
ン……ツツ♡♡」

僕を支えたままエレベーターを降りホテルの廊下を歩く。部長はその間ずっとシャツの上から乳首をぐり♡ぐり♡していた。

部長に支えられながら歩く僕はホテルの廊下なのに恥ずかしい声が止まらなかった。

「部屋に着いたぞ、大丈夫か？ カードキーはどこだ？」
(チッ、折角イイ感じに発情してるってのに……このまま部屋に連れ込んで犯してえな。この小せえケツに一日中チンポはめ込んで、俺のチンポの形覚えさせて、俺なしじゃいられない身体にしてやりてえわ……)

「ああ あ……っ♡♡ ぶちよお……っ♡♡ぶちよおお
……っっ♡♡ あうううう……っ♡♡」

部長の右手がカリカリ♡♡僕の乳首を引っ搔く。絆創膏越しに硬い爪の感触が当たる。

左手はカードキーを探すフリをして腰やお尻を撫でた。
いやらしい声が聞こえ、頭の中に自分が犯されてる映像が流れ、全身にジン♡ジン♡熱が回る。

お尻の孔が、ぐずぐずに蕩けそうなくらい熱く切なく疼く――

(こ、こんなの……っっ♡♡ がまん♡できない……
っっ♡♡ おしり♡……熱くて……むずむずして……へん
に♡なる……っっ♡♡)

「佐々木？ 大丈夫か？」

(クソッ、エロい声で呼ぶんじゃねえよ。マジでチンポ
挿れたくなるだろうがっ。後ろからガンガン犯して腹
パンパンになるまで種付けして……)「しっ♡してくだ
さい……♡♡」

「……………佐々木？」

僕は夢中で蓮見部長に抱きついた。

「ぶ、部長の♡したいこと全部してください……っ♡♡
僕にしたいと思ってること全部……♡♡ ぶちょーの好
きに♡してください♡ い……っっ♡♡♡」

聞こえてくる声かもし部長の心か声じゃなく僕の頭が
おかしくなっただけなのだとしたら、僕はただ上司に抱
きつきおかしな事を言う変態扱いされていただろうけ
ど、……そうはならなかった。

「ッ……さ、佐々木……ッッ」

僕を見る目が一瞬にして雌を見る雄のソレに変わった部
長は、何かを考える事すらなく僕を部長の部屋に連れ込
んだ。